



一人ひとりのニーズに即した教育の保障を願って その1

わになろう会理事長 新井 靖子

稲田中学校は伝統のある大規模校。したがって転勤まで22年間もお世話になった前任校とはさまざまな面で違っていた。ありがたかったのは先生の数も多いので校務分掌の負担が少なく、部活動の顧問も無理に引き受ける必要はなく、転勤した当初は支援級の運営に専念させてもらうことができた。

全校あげての協力体制もよく、支援級(当時は特殊学級)のあり方を検討するための校内組織も作られた。各分掌や教科の主任が集まるその会議では、支援級の生徒たちが居心地よく学校生活を送ることができるように支援級の位置づけや個々の生徒の特性に合わせた交流のあり方、学校・学年行事での障がい配慮した取り組み方など様々なことを検討することができた。そうした中で30数年前の当時としてはまだ稀だったいくつかの試みを実践することができた。

○ 生徒の所属学級についての考え方

どの生徒も、所属する学級の一員である前に、等しく稲田中学校の生徒であることを前提に、支援級所属の前に親学級の一員として受け止める。本当は△年△組の一員として生活したいけれど、さまざまなハンディキャップがあるため、一人ひとりのニーズに即した力を付けるため支援級にも籍を置き、そこで必要な生活や学習の援助を受けるのだということ全校の生徒や先生たちに理解してもらえよう、学年集会などで折に触れて話をさせてもらった。お客様として親学級(交流級)で大事にしてもらう存在ではなく、クラスの仲間を支援級に派遣しているような意識が広がればよいと願った。

それには学級担任の意識が大事と考え、支援級への入級を希望している生徒を自分のクラスで引き受けたいと自発的に考えてくださる先生と事前に相談をして学級編成をしてもらった。もちろん障がいの状況や特性、学校生活の中で配慮しなければならぬことなど入学時点でわかる限りの情報を提供した上でのことである。

○ 親学級で学ぶ教科の自由選択

当時は、通常学級の中で学ぶ交流教科を体育・音楽など特定の教科に限定している学校が多かった。

発達に大きな偏りがあるため学校生活がうまくいかず不適應をおこして支援級への入級を望んだ人たちは実に多様な才能の持ち主でもあった。そんな人たちには入学時点での面談で、通常級で学びたい教科を自分で選んでもらい保護者とも相談した。選択肢は9教科全部にわたったため、各教科すべての先生たちの理解がなければ無理なことだったが、幸いなことに先生方の理解も得ることができた。

もちろん日常の学習は全て支援級で行い、学年・学校行事のみ親学級とともに行動する生徒たちもいた。支援級に籍は置かないが、不登校や基礎学力がついていないなどの事情で特別な配慮が必要な生徒たちが逆に通級してくることも受け容れた。

要は、通常学級と支援級の垣根をできるだけ低くして、個々のニーズに応えたかったのだ。

○ 成果を競い合う行事での工夫

自然教室、夏季施設、遠足、修学旅行などの他にマラソン大会、体育祭、合唱コンクール、百人一首大会など、毎年多くの行事があった。それらは厄介なことに学級毎や色分けされたチームで成果を競い合うものが殆どだ。障がいのある生徒たちにとってクラスメートと触れ合う貴重な機会ではあるが、周りのみんなに合わせて行動することが求められ、ガマンを強いられる辛い時間でもあった。

楽しく参加でき、学級集団のまとまりにプラスになるような関わり、しかも評価の足を引っ張るようなことがないように支援級担任はそれぞれの親学級の生徒たちにも気を遣った。体育祭の学年種目ではより早く走るとか、難しいルールを理解し機敏に動くことを要求されることなく、ハンデを気にしないで参加できる工夫を学年会で練った。

合唱コンクールの評価基準には「演奏中に支援級の生徒が不規則な声を出しても評価の対象にしない」との項目が入れられた。歌が得意で美声の持ち主もいたが、中には歌詞は全部覚えているがどうしても音程の取れないタイプの人もいた。この基準については異論もあるだろうが、そのお陰で遠慮なく合唱に仲間入りできた生徒は幸せだった。基準、規則は何のために? と原点を考えさせられた。